

明治の外交官 佐藤愛麿

さとうあいまる

一八七六年（明治九）七月のある日、東奥義塾の生徒十名は、ジョン・イング先生に引率されて弘前から青森へ向かった。まだ汽車も自動車もない頃の、しかも険しい石ころ道の旅は大変だった。

七月十五日、東北地方をご巡幸していた明治天皇が青森へお出でになるというので、晴れの天覧授業（天皇の前で日頃の学習の様子を表す）をするための青森行であった。一行は、珍田捨巳、森可次、伊東重、川村敬三、田中五郎、成田良司、佐田吉之丞、工藤儀助、武田邦雄、そして佐藤次郎（愛麿）の十名であった。いずれも、その日の為に特別に選抜された成績の優秀な生徒ばかりだった。愛麿十九歳の時の事である。

七月十六日、青森小学校で待機していた十名は、やがて天皇の前に進み出て、各人それぞれ、日頃学習した内容を発表した。英語による演説や文章の朗読などである。珍田は「ハンニバル士卒を励すの弁」という演説を、伊東は「シセロ、カテリンを語る弁」を、佐藤は「愛」と題する文章を朗読した。どれも本にあるものを暗誦し、あるいは朗読したのだが、それにしても、東北の片隅にある小さなまちの学校の生徒が、流暢な英語で発表したのだから、天皇を始め随行した役人や新聞記者は驚いて目を見張った。新聞は「十人の生徒には、お賞賜

としてウェブストル中辞書一部の代金五円ずつ、またジョン・イング夫妻には拝謁を賜り、金若干を下された。」と大きく報じ、東北青森の東奥義塾の名が一躍日本中に広まった。これら十名の生徒たちは、のちにそれぞれの分野で活躍する秀れた人物だが、珍田と佐藤は、共に外交官として活躍、日本の外交史に大きな足跡を残す事になる。

一八五七年（安政四）、愛鷹は、津軽藩の重臣山中兵部の二男として生まれた。始めは次郎といい、珍田とは一つ年下の同輩だった。二人とも、藩の学寮（学校）で漢学や英学を学んだあと、東奥義塾に入学した。一八七四年（明治七）、米国人教師ジョン・イングが来弘し、次郎らはその指導を受けたが、翌一八七五年（明治八）には他の十三人の塾生と共に集団でキリスト教の洗礼を受け、信者となっている。一八七六年（明治九）五月、愛鷹は元勘定奉行の佐藤清衛の養子となり佐藤姓を名乗ることになった。

「どうだね、君達、アメリカの学校で勉強する気はないか。」

「え？ アメリカで？」

「よければ、私の母校である、アズベリー大学へ紹介しようと思うんだが。」

ある日の事、イング先生は、佐藤らに話しかけた。いつも学校で、先生から、アメリカを始め世界各国の歴史や文化について聞かされて

いた彼等は、この話に目を輝かした。これからは、日本だけではなく、世界各国のいろんな知識を身につけ、文明と文化を吸収しなければならぬ時代である。そのためには、是非とも、自分の眼で外国の実情を見てみたいと思っていた。それがはからずも外国の大学へ、しかも先生の母校へ留学できるとは——喜んだのは当然の事だった。

ジョン・イングは、特に成績の優秀な佐藤、珍田、川村を選んで、アズベリー大学へ留学させ、出来れば、自分の後継者として立派な教師か宣教師になってほしいと思っていたようだ。イングは、早速、インデアナ・アズベリー大学にいる恩師のウィリー教授に、その事についての依頼の手紙を書いた。それには「三人の日本の若者は、すべてサムライであり騎士ナイトである。彼等は和漢学の教育を受けているが、英語の読み書きは十分であり、また熱心なキリスト教徒でもある。」と紹介している。まもなくウィリー教授から「貴方の若者たちが当地へ来られたなら、何らかの援助をする方法があると思う。」という返信が届いた。返事を見てイングも大いに力を得、早速、留学渡航の準備にかかった。それにしても、渡航する旅費や、向うでの滞在費など経費の捻出ねしゆつが大変である。イングはそれで次のような手紙を書いた。

「三人のうち、佐藤愛磨については、父が大部分を援助する事になると思う。あと二人についての旅費は、学校と私が支払うので問題は無いが、彼等がそちらへ着いた後、どのようにして生計をたてるか。彼等は自分で働く事も出来るし、休暇中には労働して生活費の幾分かは得る事が出来るだろう。彼等の年間の経費は、つつましいアメリカ人学生の半分以上にはならないと思う。」

つまり、学生達は、必ずしも経済的には恵まれてはいないので、働きながら勉学出来るように、便宜を計って下されれば有難い、という内容だった。また、「彼等は、ギリシヤ語、ラテン語の学習は、数ヶ月以内に修了する見込みである。」と、その勉学ぶりも申し添えた上で、「出来るなら、彼等の授業料はいくらかでも減じてくれるよう。テキストも使い古しの物でよいから、その点の援助もお願いする。」と、細かく気を遣っている。

このようなイングの尽力によって、佐藤ら三人（実は、イングが中国から連れてきていた孤児黄藩之と、当時の県大参事那須均の子、那須泉も同行する事になって都合五人となった。）は、いよいよ念願のアメリカへ留学出来る事になった。東奥義塾の職員も彼等のためにきよきん醸金をし、特にイングは、これまで机の引出しに入れたままにしていた給料袋のお金全部を、彼等のために出してやったという。

愛磨の父清衛は、息子の留学のために、田畑を売り払って金を持たせた。のちに佐藤は、アメリカに渡航したときの事を思い出して、「一八七七年（明治十）私たちは米国へ留学する事になったが、二人とも（珍田と佐藤）貧乏なので、横浜の日蔭町で古洋服を買い込んで行った。」

と語っている。

さて、無事にアズベリー大学へ入学出来た彼等は、奨学金を貰い、休みには労働をして生活費を稼ぐなど、文字通り勤労と学業を両立さ

せながらがんばった。当時、アズベリー大学で同級生だったヘンリーは、彼等について、

「四人の日本人学生は、窓ひとつしかない屋根裏部屋で食べ、眠り、勉強していた。その代償として門番をしたり、石炭を運んだり、教室を掃除したりしていた。」

とその思い出を語っている。

このような苦しい環境にありながら、彼等はよく勉強した。いろいろな会合にも積極的に参加した。中でも佐藤は、共和党の政党演説会で名演説をして聴衆を感心させたり、婦人参政権についての意見を述べるなど、語学力は相当なものだった。

一八八一年（明治十四）、佐藤ら三人は、無事アズベリー大学を卒業した。初め学生は八十五名だったが、卒業できたのは半数以下の三十名だけだった。しかも卒業式の時には三人とも（佐藤、珍田、川村）、選ばれて堂々と卒業演説を行っている。いかに成績優秀だったかわかる。

アメリカの大学を卒業して帰国すると、珍田は東奥義塾の教師となり、佐藤は外務省書記官の仕事についた（川村は宣教師となったが、帰国後間もなく病死した）。このあと、一八八四年（明治十七）、珍田も外務省に入って、共に外交官の道へ進んだ。珍田が外交官を志したのはおそらく、外務省では先輩に当たる佐藤のすすめによったものだろう。

佐藤は、ワシントン公使館やロンドン公使館などで書記官として勤めたあと、その英語力を認められて、一八九三年（明治二十六）には外務省電信課長並びほんやく翻訳課長として活躍、翌年からの日清戦争（日本と中国との戦争）には、外務大臣陸奥宗光の特別の命を受けて日清の外交交渉に力を尽くした。佐藤はその功績を認められて、勲四等旭日小綬章をうけている。

佐藤が、外交面で最も華々しい活躍をしたのは、ポーツマス講和条約に随員として参加した事だろう。一九〇四年（明治三十七）におきた日本とロシアの戦争は、その翌年、アメリカの斡旋もあって、アメリカのポーツマスで講和のための条約を結ぶことになり、日本は外務大臣の小村寿太郎を全權大使として派遣、ロシア側のウエツテ代表との交渉に当たらせた。当時、外務省で随一の暗号専門家といわれた佐藤は、随員として選ばれ代表团に同行した。

日本の国民は、大国ロシアに勝ったことに喜び、条約の内容も日本側に有利に決まるものと、交渉の成り行きに注目していた。しかし実際は、二年間の戦争で国力を使い果たした日本は、これ以上戦争を続ける事はとても無理な状況だったのである。だからどうしても講和条約を結びたかった日本にとって、ある程度ロシア側の要求をのまなければならない立場にあったといえる。この間の苦しいやりとりは、全て暗号電報で日本へ連絡して一々政府の指示を仰がねばならない。小村や佐藤の苦心も大変なものだった。度重なる交渉や決裂を繰り返しながらも八月二十九日、漸ようやく講和条約は締結した。しかし、その内容に不満を持った一部の国民は、警察署や教会を焼き打ちするなどの騒

ぎを起こしたが、ともかく講和は締結した。佐藤は、この時の功績が認められ、勲二等旭日重光章を授与されている。

一九〇二年（明治三十五）、佐藤は、親戚の田中家から養子として尚武を迎えた。佐藤には三人の子があつたがいずれも娘だった。佐藤家の養子になった尚武も、父愛磨のすすめもあつて外交官となり、のちに外務大臣などに就任した。

佐藤は、オランダ特命全権大使やオーストリア全権大使などを勤めたあと、一九一八年（大正七）に外務省を退官するが、その後も外交官の長老として後輩の指導にあつた。

一九二六年（大正十五）五月十九日の東奥日報に『敬愛すべき郷土の偉人、佐藤愛磨氏を訪う』という次のような記事が出ている。

「麻布鳥井坂の佐藤氏の私邸を訪ねてみた。小さい鉄門をくぐると、身分の低い役人が住むような小さい家、これが嘗ては我国全権大使として米国に大手腕を振った人の邸としては余りにも質素であり、如何にも津軽武士の質実な気風を偲しのばせる。普通、外交官畑の人は、部屋はくらいに舶来の油絵や彫刻の一つ二つぐらひは飾っておくものだがそれもなく、外交官という仕事とは反対の、古武士の佛おもかげに満ちていた。」

外交官の長老にしては大変質素な家だし、長い間外国暮らしをしてきた人が、思いがけなくも古武士的な雰囲気きふんきを漂かわせていたのに、新聞記者も驚いたのであろう。

一九三四年（昭和九）一月十二日、佐藤は東京麻布の自宅で死去した。七十八歳だった。佐藤の死を惜しみ、新聞はどれも生前の外交畑での功績を讃えたが、アメリカでもその死を惜しみ、「前日本国外交官佐藤愛麿死去す」という見出しで、新聞に大きく功績を報道した。しかも「ポーツマス平和条約特使の任務を果たした後、一九一六年から一九一八年まで駐米大使、軍縮交渉に参列、米国の交友関係樹立に努める。」と紹介した他に、アメリカのアズベリー大学で苦学した事から、外交官としての功績の数々を挙げ、日本の新聞以上のスペースで大きく取り上げている。つまり、それだけアメリカは、彼の外交官としての手腕を高く評価していたという事である。

さて、佐藤と珍田は、東奥義塾から、アメリカのアズベリー大学へ進み、卒業後も共に外交官として活躍し、終生仲がよかった。珍田は年は一つ上だが、佐藤の妹を嫁に迎えている事からいえば、珍田は佐藤の義理の弟という関係になる。養子の尚武はこの二人について、

「父愛麿と珍田さんは、幼少時代からの竹馬の友であり、<sup>ナ</sup>汝、<sup>ワ</sup>我の間柄だった。珍田さんも父も共に玉突きや囲碁が好きでよく対戦していた。父の球はいわゆるガチャガチャ球で乱暴だが、珍田さんのはきちんとしている。しかし勝負にかけては父の方が少し強いので、珍田さんは負けると、そんな乱暴な球はないと言って、ぶんぶん怒ってしまう。しかし囲碁は珍田さんの方が一枚上手だったので、父はどんなに歯ぎしりしてもかなわなかった。」

と語っている。



一九三七年（昭和十二）六月、日本政府から、アメリカのデポー大学（かつてのアズベリー大学が、その後校名を変えた）の図書館に立派な壺が贈られた。高さが八十三<sup>センチ</sup>糶もある見事な壺である。壺について、デポー大学の新聞は次のように紹介している。

——『日本の外務大臣佐藤尚武氏より、デポー大学の創立百年を記念して贈られた。』

この文は、デポー大学図書館に展示されている美しい日本の花瓶の台に記された献呈の言葉である。学生達が、美しい壺に驚いて立ち止まった時、かがみ込んで読むのがこの献呈の言葉である。現代的にデザインされたケースにしまい込まれたその壺は、昨年六月の創立百年祭に日本政府からデポー大学に贈られたものだ。千五百ドルの価値があるといわれるこの贈り物の壺には、大変重要な意味がある。それは、日本とデポー大学との長い友好の印だからである。デポー大学へ最初に入った外国人の学生は、一八八七年の四人の日本の少年だった。その中の一人は二年生の時に亡くなり、もう一人の川村敬三は、文学士の資格を得た一年後に東京で死んだ。一八八一年に卒業のクラス他の二人は、日本の外交官として名声をあげた。すなわち珍田捨巳は、一九一二年にアメリカの特命大使となり、佐藤愛磨は外務省の長官となった。愛磨の息子の佐藤尚武は、日本の外務大臣となり、珍しい贈物を贈ってくれた。——

一八八七年（明治二十）から四年間、佐藤らが学んだデポー大学（アズベリー大学）の図書館の玄関には、同大学と日本との深い友好を物語るかのように、今もその美しい日本製の壺が飾られている。

**参考文献** 佐藤尚武『回顧八十年』一九六三年（昭和三十八）時事通信社

山本 博『津軽の英字』（4）弘大』弘大・文化紀要21』一九八五年（昭和六十）弘前大学

**出典**…弘前人物志編集委員会編『中学生のための弘前人物志平成十五年度版』二〇〇三年（平成十五年）弘前市教育委員会、一二九～一三八頁